

狭山茶の歴史と自然

日時：令和4（2022）年6月9日（木）（10：00～11：30）

会場：東京都薬用植物園 研修室 講師：小田部家秀（元入間市博物館学芸員）

【 I . 狭山茶の自然 】

1. 植物としての「茶」

（1）「お茶の木」ってどんな植物？

◎【問題】茶（チャ・チャノキ）を学名で書くと、下の3つのうちどれでしょう？

- ① *Camellia sinensis*（カメリア シネンシス） _____
- ② *Camellia japonica*（カメリア ジャポニカ） _____
- ③ *Camellia sasanqua*（カメリア ササンクア） _____

・茶は「ツバキ科ツバキ（*Camellia*）属」の仲間。

◎チャ（チャノキ）の花・果実・種子

- ・花は、秋から初冬に今年伸びた枝に付く。実は、翌年の秋に熟す。
- ・実の中に1～4個の種子。地形図で茶畑を表す地図記号「∴」のデザイン。

◎チャ（チャノキ）の変種

- ・ *Camellia sinensis* var. *assamica* = **アッサム種**
大葉種。樹高が高く、主幹と側枝の区別が明らか（きょうぼく 喬木）。紅茶用に向く。
- ・ *Camellia sinensis* var. *sinensis* = **中国種**
小葉種。樹高が低く、根元から多くの幹が出る（かんぼく 灌木）。緑茶用に向く。
- ・ 中国種の大葉品種 = *Camellia sinensis* var. *sinensis* f. *Macrophylla*
“macro” = 大きな “phyllous” = 葉（亀の甲羅状の葉）
トウチャ（唐茶）：三倍体植物。コーロ（阜蘆）：二倍体植物。

（2）チャのふるさと…しょうようじゅりんたい照葉樹林帯

◎しょうようじゅりんたい照葉樹林帯…ヒマラヤ山脈南麓から中国南部、日本の南西部。温暖多雨地域。

- ・ *Camellia* 属のルーツ…中国南部から東南アジアに150種以上。チャもその1種。

◎日本の茶産地…温暖多雨な照葉樹林帯に分布。関東以北は、茶栽培のほうそう北限地帯。

◎ほうそう防霜ファン…放射冷却の夜、上空6～6.5mの空気を吹き降ろして霜を防ぐ。

（3）茶の3大成分

◎カフェイン(苦味)…高温の湯ですぐに溶出。

- ・眠気を覚ます／疲労感を減らす／興奮をもたらす／強心／利尿作用

◎カテキン(苦味・渋味)

- ・抗酸化作用／抗菌、抗ウイルス作用／虫歯予防／がんの発生を遅らせる

◎テアニン(甘味・うま味)…低温の湯(水)でも溶出する。

- ・リラックス効果／興奮を和らげる／血行を良くする(冷え解消)

◎遮光栽培…テアニンがカテキンに変化することを抑制する栽培方法。

- ・^{おいした}覆下栽培、かぶせ茶…抹茶や玉露に用いる。
- ・「霧が立ち込める山」、「^{ようがいんりん}陽崖陰林」…天然の遮光効果。

(4) 実生(在来)茶園と品種茶園

◎実生(在来)茶園…「種子」で殖やした茶の木。

- ・茶は「他花受粉植物」。種子で殖やすと1本ごとに性質の異なる木になる。
- ・凸凹した^{うね}畝。新芽が伸びる早さも揃わない。→機械摘みに適さない。
- ・品質(味や香り)や耐病性・耐寒性もさまざま。→遺伝子の多様性。

◎品種茶園…「挿し木」で殖やした茶の木。

- ・性質が全く同じ木(クローン)が大量に生産できる。
- ・畝全体が同じように成長し、新芽が伸びる早さも同時。→機械摘みに適する。
- ・気象災害や病害虫の被害が集中しやすい。

◎埼玉県の茶畑の品種化率…98.3%(令和2年)

- ・**やぶきた** 65%(全国73%)、**さやまかおり** 19%(全国2%)、**ふくみどり** 8%
- ・^{ごうくみ}合組(ブレンド)とシングルオリジン(単一品種・単一農園)。

2. 狭山茶産地の地形・地質

(1) 「狭山茶」の産地

◎「狭山」ってどこ?…「狭山丘陵」のこと。

- ・「狭山」…広大な武蔵野台地の中に、小舟のように浮かぶ「**狭い山**」。
- ※山奥へ分け入るほど、舟の舳先のように南北の幅が「**狭まる山**」という説も

◎狭山丘陵を取り囲む、**周辺の台地**(武蔵野台地・入間台地など)で栽培。

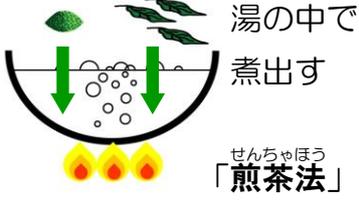
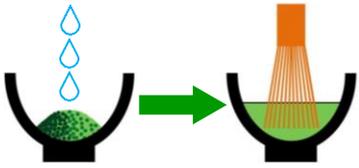
- ・「**狭山茶**」…埼玉県と、隣接する東京都で生産される茶の総称(広域ブランド名)。
- (生産量上位3市…1位:入間市、2位:所沢市、3位:狭山市)

◎武蔵野台地…多摩川の^{せんじょうち}扇状地。^{されきそう}砂礫層と関東ローム層→水はけ良く、水田に不適。

- ・茶は、雨が多ければ、水はけのよい台地でも栽培できる。「^{じょうしつ かん}上湿下乾」

【Ⅱ．狭山茶の歴史】

1. 日本茶の歴史 ～茶は「3度」中国から日本へ伝わった～

飲み方	日本へ伝わった年代（世紀）	日本に伝えた（広めた）主な人物	日本で主に茶を飲む人や場面・茶の産地
<p>①煎じる（せんじる）</p>  <p>湯の中で煮出す 「煎茶法」</p>	<p>第1期伝来 (8～9世紀)</p> <p>中国：唐 日本：平安時代</p>	<p>最澄</p>  <p>804年に遣唐使として唐に渡る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・僧侶、貴族。 ・朝廷や寺院で行われる儀式。 ・密教儀礼での供物（例：北斗法）。 ・畿内（京都、奈良）とその周辺で生産。
<p>②点てる（たてる）</p>  <p>粉末茶に湯を点す「点茶法」</p>	<p>第2期伝来 (12世紀)</p> <p>中国：宋 日本：鎌倉時代</p>	<p>栄西</p>  <p>宋に2度渡り『喫茶養生記』を著す。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・密教儀礼や、禅宗での日常生活。 ・武家へ喫茶の習慣が広まる。 ・各地の寺の境内茶園 ・鎌倉～室町時代の唐物荘厳。 ・安土桃山時代、侘び茶（茶道）の完成。
<p>③淹れる（いれる）</p>  <p>葉茶を湯にひたし染み出たエキスを飲む 「淹茶法」</p>	<p>第3期伝来 (17世紀)</p> <p>中国：明 日本：江戸時代</p>	<p>隠元</p>  <p>1654年に明から来日。釜炒り煎茶が広まる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・江戸幕府による抹茶の生産統制（宇治のみが公認）。 ・釜炒り製法の広がり。 ・永谷宗円による蒸し製煎茶の発明。 ・江戸の庶民に蒸し製煎茶が人気に。

(1) 第1期伝来：唐から伝わった煎茶法

遣唐使として唐に渡った僧が、仏教の儀式に使うため、茶を日本へ持ち帰った。

◎煎じる（煮出す）茶＝煎じ茶

- ・添加物で味付けをする…中国（唐）では塩を入れる。日本では、甘葛（ツタの樹液から作る甘味料）、厚朴（ホオノキの樹皮）、生薑などを入れる。

◎密教儀礼での修法壇の供物（天台宗・真言宗など）

- ・北斗法…茶は長寿の秘薬である仙薬。これを供えて星に健康長寿を願った。

◎畿内とその周辺で茶の生産が始まる

- ・日吉茶園…天台宗の総本山、比叡山延暦寺（滋賀県大津市）の山麓。
- ・嵯峨天皇は、畿内と近江・丹波・播磨など（現在の京都・奈良とその周辺）に茶を植えさせ、毎年献上するよう命じた（『日本後紀』）。

(2) 第2期伝来：宋から伝わった点茶法

日宋貿易や、禅宗の僧などによって、宋の時代の点茶法による新しいお茶の飲み方が日本へ伝わった。

◎煎茶法と点茶法の併存、使い分け

- ・密教儀礼、大人数の公的行事 → 煎茶法（煎じ茶）
- ・贈答儀礼、少人数の私的飲用 → 点茶法（抹茶）

◎荣西（ようさい・えいさい）（1141～1215年）

- ・禅密兼修の僧。天台宗(密教)では「葉上房荣西」、臨济宗(禅)では「明庵荣西」。
- ・宋に2度渡った荣西は、『喫茶養生記』を著し、茶が長生きのための仙薬で、万病の薬と説いた。また、宋代の点茶法による製茶法、喫茶法を説いた。
→「心の臓は苦味を好む。」「心の臓は是れ五臓の君子なり、茶は是れ苦味の上首なり。」…カフェイン（苦味）の作用。
- ・寺院から武家へ喫茶習慣が広まる…荣西が将軍・源実朝に茶を献じる。
『吾妻鏡』（鎌倉幕府編纂の歴史書）の健保2年（1214）2月4日の条。

◎茶産地の全国拡大

- ・寺院…密教寺院 ⇒「儀礼の供物」としての茶の使用量が増加。
…禅宗寺院 ⇒儀礼に加え「日常生活」でも消費される。
- ・武士層 ⇒新興の武士層にも喫茶習慣が広がり、喫茶人口が拡大。

全国的に茶の消費量が増えると、畿内の本山から支給される茶だけでは足りなくなり、地方寺院でも自家消費のための「境内茶園」が営まれるようになる。
⇒茶の産地が全国各地に拡大。

◎唐物荘厳・・・鎌倉～室町時代の茶会の室礼。

- ・部屋に唐絵、唐物を飾り、卓子（机）を囲んで、来客用の胡床（腰掛け）には豹の毛皮を敷き、主人の竹倚（椅子）には金紗を敷いた中国風の室礼。
- ・青磁・白磁などの中国産輸入陶磁器は、権威を示すステータスシンボル。

◎侘び茶(茶道)の成立・・・安土桃山時代に千利休（1522～91）が完成させる。

- ・「中国風」で豪華絢爛なイメージ ⇒ 「和風」で質素なイメージへ

◎江戸幕府による「抹茶」の生産統制

- ・安土桃山時代…宇治で覆下栽培が開発される。
※覆下栽培…気候の寒冷化による霜除けとして始まる。抹茶の風味が向上。
- ・江戸時代…覆下栽培による抹茶の製造は、宇治の限られた茶師にのみ公認。
- ・1633年、幕府は将軍御用の宇治茶を毎年江戸に運ぶ「御茶壺道中」を制度化。

露地栽培で作る地方産の抹茶はブランド価値を失い、銘柄は消滅。しかし、茶の木は、山の中で野生化したり、畑の畔や垣根に利用されたりして生き残り、いわゆる「番茶」として庶民に飲用され続ける。

(3) 第3期伝来：明から伝わった淹茶法

茶葉を湯にひたして染み出たエキスを飲む淹茶法が明から日本へ伝わった。

◎釜炒り煎茶の伝来

- ・1654年に来日した黄檗宗の僧隠元などによって日本へ広まった。
- ・茶葉を釜で炒る → 揉む → 釜で炒る（繰り返す）
- ・釜炒り煎茶は、佐賀県の嬉野茶など九州で多く作られる。

◎蒸し製煎茶の発明

- ・庶民は安価な「番茶」（茶色い茶）が主流。
→「抹茶」のような緑色で風味の良い茶が飲みたい！
- ・永谷宗円（1681～1778年）…京都府宇治田原町湯屋谷の篤農家。
元文3年（1738）、「蒸し製煎茶」の製法を発明。＝日本独自の製茶法
- ・新芽を蒸す（抹茶の製法）→揉みながら乾かす（釜炒り煎茶の製法）
- ・江戸時代後期（1750年代頃）から蒸し製煎茶が宇治から江戸に流入。
- ・急須でお茶を淹れる飲み方が、江戸の庶民へも広がっていく。

2. 狭山茶の歴史

(1) 狭山茶の起源・・・河越茶と慈光茶

◎中世の文献に登場する茶産地

- ・いずれも、鎌倉・室町時代に大きな勢力をもった天台宗の大寺院があった場所。
河越茶…無量寿寺（川越市小仙波町）、現在の中院・喜多院。
慈光茶…慈光寺（ときがわ町西平）、坂東三十三所九番札所。
- 天台宗では、平安時代より儀式の供物として茶が使用されていたので、本山である比叡山延暦寺（滋賀県）から茶の供給を受けていた可能性あり。
- 鎌倉時代以降、自給のための境内茶園で栽培・製茶が始まったと考えられる。

◎河越茶…『新撰遊覧往来』（14世紀）、『異制庭訓往来』（14世紀）に登場。

- ・京都で編纂された「往来物」（初等教科書）。

◎慈光茶…『旅宿問答』（永正4年：1504）に登場。

- ・関東（河越）の天台談義所（無量寿寺？）で編纂された本。

- ◎『異制庭訓往来』・『新撰遊覚往来』・『旅宿問答』からわかること。
 - ・京都では、……………「武蔵国」の銘茶といえば「河越茶」
→周辺地域で生産される茶の集散地。流通先では、「河越から来た茶」が河越茶。
 - ・関東(河越)では、…「武蔵国」の銘茶といえば「慈光茶」
→地元で知られる山地の名産地。

(2) 河越茶の産地

- ◎無量寿寺（川越市小仙波町）…現在の中院・喜多院
 - ・平安時代：最澄さいちょうの弟子円仁えんにん（794～864）が開山。
 - ・鎌倉時代：1296年に尊海そんかい（もと慈光寺の僧）が再興。
中院に仙波談議所（檀林：天台宗の学問所）が設立。
 - ・現在、中院境内に「狭山茶発祥之地」の碑がある。
- ◎河越氏…河越かわごえ荘しょうを支配した武蔵武士の名門。
 - ・水陸交通（入間川と東山道武蔵路）の結節点付近に館を築き、交通と物流を支配。
 - ・河越館跡から点茶法による喫茶道具や、中国産輸入陶磁器が出土。

(3) 慈光茶の産地

- ◎「幻の銘茶「慈光茶」再現実験」（約10分）を動画で配信中！
（入間市博物館アリットお茶大学研究生コース制作）

YouTubeから「慈光茶」で検索、または
こちらのQRコードからご覧ください →



- ◎慈光寺（ときがわ町西平）
 - ・都幾山とときさん（標高463m）の南斜面一帯に広がる広大な山岳寺院。
 - ・奈良時代：鑑真かんじんの弟子道忠どうちゆうが770年に開山。
 - ・平安時代：最澄さいちょう、円仁えんにんが来山したとされ、天台宗の寺院となる。
 - ・鎌倉時代：鎌倉幕府の祈願寺。源頼朝の帰依と庇護を受け発展。
京都の名門貴族・藤原氏九条家との繋がり。→国宝法華経一品経ほけきょういっほんきょう
有力東国武士との繋がり…畠山氏・比企氏・安達氏・吉見氏
 - ・慈光寺僧坊跡（県選定重要遺跡）…かつての僧の住居跡。都幾山の南斜面一帯に斜面を削った平坦地が100カ所以上ある。
 - ・僧坊跡から、中世の青磁白磁などの中国産輸入陶磁器や茶器が採取されている。
- ◎栄朝えいちよう（1165～1247）…鎌倉時代の慈光寺僧。
 - ・建久8年（1197）に慈光寺に塔頭たっちゆう（子院）として靈山院りょうぜんいんを開く。
 - ・正治元年（1199）頃、栄西の弟子となり天台密教と禅（臨済宗）を修める。
→栄西と同じく禅密兼修の僧。

- ・栄朝は、承久3年（1221）に上野国世良田（群馬県太田市）に長楽寺を開く。
 - ・寛元の銅鐘…寛元3年（1245）に栄朝が願主となって慈光寺に奉納した梵鐘
 - ・長楽寺の栄朝のもとで修業した円爾（聖一国師）は、静岡茶の祖と言われている。
- ◎慈光寺山内の自然環境…『茶経』（陸羽著：中国唐代）に書かれた条件と類似。
- ・「陽崖陰林」…都幾山の南向き斜面、山林の木陰に茶がある「天然の覆下茶園」。
 - ・「爛石」…堆積岩が風化して出来た土壌を最適とする。
 - ・「紫ナル者ハ上」…紫笋茶（浙江省で生産される、かつて皇帝に献上した貢茶）
→多様な遺伝資源を有する貴重な茶の在来種集団。

◎慈光茶のルーツを探る

- ・大陸のチャは雌しべが長いタイプが多い。→日本の茶は「瓶首効果」が見られる。
- ・慈光寺山内の茶樹 436 株の花を調査。→67%が雌しべが長いタイプ。
- ・雌しべ型の出現パターンが中国浙江省と似る…大陸風の特徴を色濃く残す個体群。
- ・寛元の銅鐘…奉納者の一人に妙空の名がある。→中国（宋）に渡った僧がいる。

（４）河越茶・慈光茶の衰退

◎戦国時代

- ・無量寿寺…天文6年（1537）北条氏綱の河越城攻めの際、灰燼に帰す。
- ・慈光寺…天文年間、北条氏康の家臣・上田氏が焼き討ち。「伽藍多く灰燼と化す」。
→茶園を経営する有力寺院が衰退。

◎江戸時代

- ・江戸時代…覆下栽培による抹茶の製造は、宇治の限られた茶師にのみ公認。
露地栽培で作る地方産の抹茶はブランド価値を失う。
→抹茶としての河越茶・慈光茶というブランド銘は消滅。しかし、茶の木は、山の中で野生化したり、畑の畔や垣根（畦畔茶）に利用されたりして生き残り、番茶などに使用され続ける。

（５）江戸時代後期・・・「狭山茶」の誕生

◎困窮にあえぐ農家の生活

- ・水田稲作に向かない武蔵野台地。
→「地薄くして、粗民の食、力むるに於てしこうしても足らず」（村野矩邦墓碑銘）
- ・少しでも暮らしを楽にするために・・・江戸で需要が高まっており、収穫の確実性もあり、換金作物として収益性の高い「蒸し製煎茶」に目を向けた。

◎狭山丘陵の北麓で…吉川・村野の挑戦。

- **吉川温恭** (1767~1846)：二本木村西久保（現・入間市）、宮大工
- **村野盛政** (1764~1819)：坊村（現・東京都瑞穂町）、剣士・俳人
- 享和2年（1801）6月、吉川は狭山丘陵北麓・稻荷沢の畑で摘んだ茶葉で釜炒り茶を作り、友人の村野に飲ませた。それから約10年、2人は茶作りを研究。
- 文化11年（1814）、吉川は、本場の「蒸し製煎茶」製法を学ぶため、伊勢・金比羅参りの帰途に、京都や近江地方で行われていた「宇治製法」を見聞。
- 吉川は、宇治に人（吉川作右衛門？）を派遣し、現地で数年間実習させる。
- 文化13年（1816）、吉川と村野は、江戸の茶商・山本山へ作った茶を贈る。山本山の**山本嘉兵衛徳潤**は、この茶を絶賛し、販路拡大に協力することを約束。
※山本嘉兵衛(徳潤) (1778~1819)：茶商（江戸 山本山五代目）
 →既存の茶問屋の利権がからまない新たな茶産地を江戸近郊に開拓したい！
- 文政2年（1819）6月、江戸の茶問屋と取引を開始
※狭山茶産地で初めての「売買契約書」（吉川家文書）「狭山出産之宇治製茶」

◎ **重 関 茶 場 碑**（入間市宮寺・出雲祝神社）…茶作りの「復興」記念碑

- 天保3年（1832）、吉川・村野が茶作りを始めたきっかけの地、狭山丘陵北麓にある宮寺・**出雲祝神社**の境内に建碑。
- この碑文の草稿文に「**狭山茶**」の名称が初めて登場する。

『重 関 茶 場 碑』の碑文

州の北、河越の野に狭山あり。多磨・入間二郡に跨がり、古名茶を出す。（中略）然り而して歳月の久しく茶戸衰替して佳種灌莽深荊の間に蕪没するや。其他各場培養の法を失い、製また精からず。惟、宇治は其の名を擅にして、諸州の冠たるのみ。文政中に速んで、郷の著姓**村野氏盛政・吉川氏温恭、江戸山本氏徳潤**と胥議り、**重ねて場を狭山の麓に闢き、以て数百年の廢を興さんと欲す。**（後略）

ことばの解説

- * 州：武州。武蔵国（現在の埼玉県・東京都・神奈川県の一部）のこと。
- * 河越の野：川越の周囲に広がる武蔵野台地。
- * 狭山：狭山丘陵。
- * 茶戸衰替して…お茶を作る家がおとろえて。
- * 佳種灌莽深荊の間に蕪没する…お茶のよい種がやぶや深い荊が生い茂る中に埋もれてしまった。
- * 培養の法を失い、製また精からず…お茶を栽培する方法を失い、お茶の製造方法も分からなくなった。
- * 諸州の冠たるのみ…全国のトップブランドとなっていた。
- * 江戸山本氏徳潤…江戸日本橋の茶商・山本山の五代目。

◎加治丘陵の南麓（根通り）で…指田の挑戦。

- ・**指田半右衛門**（^{さしだはんうえもん}?~1851）：今井村（現・東京都青梅市）、篤農家
- ・宇治の茶農家で4年間下働きをしながら、製茶技術を脳裏に焼き付けて帰る。
- ・文政4年（1821）、江戸の茶問屋と取引を開始。→「**根通り茶**」の誕生

（6）「狭山茶」ブランドの拡大

- ・安政5年（1858）横浜が開港。「生糸」と「緑茶」は、日本の主力輸出品。
- ・「**狭山茶**」や「**根通り茶**」は、八王子商人が介在して横浜に出荷。
→茶商らは、**集散地名**で「**八王子茶(八茶)**」と呼んだ。

◎地元生産者たちは…

- ・八王子茶商の中間マージンや、外国人居留地の商館による不平等な商業権からの脱却を目指し、明治8年（1875）7月、製茶業者30名で直輸出を行う「**狭山製茶会社(狭山会社)**」を設立。
→さまざまな名称で呼ばれていたこの地域一帯で生産される茶の銘柄を、茶作り復興の聖地の名をとって「**狭山茶**」に統一。

◎**北狭山茶場碑**（入間市新久・龍円寺）…「狭山茶」の範囲の広がり

- ・明治20年（1887）撰文・昭和11年（1936）建碑
- ・碑文に「二つの長い丘陵があり、**南は狭山**（狭山丘陵）と言ひ、**北は金子山**（加治丘陵）と言う。この二つの丘陵の麓の村々で作られるお茶を**総称して狭山(茶)**と言う」とある。そして、狭山にある「**重闘茶場碑**」に対して、北の金子山に建てる碑を「**北狭山茶場碑**」と名付けたとする。

◎「狭山茶」が広域ブランド名に

- ・周辺地域へ「狭山茶」の範囲が拡大。**茶名にちなんだ「市名」**も新たに誕生。
→「入間の狭山、狭山の入間」…地名と市名の逆転現象。
- ・現在、狭山丘陵と加治丘陵の間に広がる**武蔵野台地の金子台**が主産地。
→東西約6km、南北約1kmの範囲に、約300ha（関東以北で最大）。
- ・埼玉県茶業協会が平成16年に制定した「**狭山茶の表示に関する基準**」
埼玉県内産及び隣接する東京都西部地域産の荒茶を100%使用した茶。同原料の荒茶を50%以上100%未満使用したものは「狭山茶ブレンド」と表示できる。

<主な引用・参考文献>

- 入間市博物館（1999）『北限への旅路—茶の自然と歴史を訪ねて—』
- 入間市博物館（2014）『改訂版 狭山茶の歴史と現在』
- 入間市博物館（2019）『史料で読み解く 狭山茶の歴史』
- 入間市博物館（2019）『入間市博物館紀要 第13号』
- 永井晋編（2020）『中世日本の茶と文化—生産・流通・消費をとおして—』 勉誠出版